
美少女仮面 ピンク エンジェル

夕月琥珀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美少女仮面 ピンク エンジェル

【Nコード】

N2472C

【作者名】

夕月琥珀

【あらすじ】

悪を倒す正義の女性ヒーロー美少女仮面ピンク・エンジェル彼女の正体は女子高生だった!?

「どうだ、何か動きはあったか？」

「いいえ、今のところ異常なしです」

「では何か起きたら速やかに報告し、指示を仰ぐように。引き続き店舗入り口付近の監視をあたってくれ」

「はっ！」

四つ葉銀行笹塚支店にはものものしい空気が張りつめ、ドライアイスの冷気のように渦を巻き淀んでいる。

閉店間際の午後三時前頃、客を装った男が突然強盗に変身してしまい、平穩なこの銀行は地獄へと化してから数時間たち、いまだに膠着状態だ。

店内では、どうなってる事なのだろう……

「チッ、金をいただいてすぐトンスラのはずだったのによー。誰かマッポ呼びつけやがって、逃げらんなくなっちゃったじゃねーか！オイ、110番したヤツは誰だ？正直に言えよ！」

「わ、わ、私達じゃありません。ひょっとして、お客様のどなたかが通報なさったのでは……」

「テメーら客のせいにするのかよ！これが“信用第一、地域密着”をモットーにした四つ葉銀行様の実体か！？ハハハ……笑わせるぜ。こんな銀行はいらねえ、オマエら全員そこに並べ。脳天に風穴

開けてやるよ！」

「いい加減そこまでにしなさい！」

「何だ、テメーは」

この極限状態で行員の誰かがどうにかなってしまったのか、はたまたコスプレ好き人間の妄想が昂じたのか、アニメか特撮ヒーローものに登場しそわないでたちの女性が突如として現れた。

仮面をつけているので顔は判らないが、犯人を討伐しようとする意志の強さが伝わってきて、拘束されている行員たちの絶望に一条のもしびを放って人質の顔に血の色を取り戻させるようだ。

「勧善懲悪、正義の味方。誰が呼んだか私の事を“美少女仮面ピンク・エンジェル”と人はいう。いい年をした悪党よ、頭を冷やして反省なさい！」

「ざけんじゃねえ！オマエも脳天に風穴開けてやる！」

ドカーン！

犯人の銃がうなりを上げて、ピンク・エンジェルに向けて火を噴いた。

「キヤーツ！」

女子行員たちは彼女がやられたとばかりに目をそむけて泣きじゃくっているが、銃弾に倒れるどころかヒラリ身をかわし、反撃に出

はじめたのだ。

「エンジェルトランペット・フレグランス！」

彼女が手を振りかざすと、溜息がこぼれてしまいそうないい薫りが漂いはじめた。

心臓の鼓動が静かに規則的になり、脳波が穏やかになりそうな気分に合わせてくれるようだ。

「あ、ああ……」

犯人の体の力も抜けていき、足元が崩れてひざまづいてしまった。

「エンジェルブーメラン・シュート！」

彼女は首飾りを外して投げると空で弧を描き、人質達を縛るロープを次々に切断し解き放っていった。

「ああ、縄がほどけた。腕が痛くなつてたんだ、ありがとう」

「さあ、あなたたちは早く逃げて！」

「そんな事、させるかよ……」

腰が抜けていた犯人がよろよろと立ち上がり、再び銃を構えようとした。が、ピンク・エンジェルはまた首飾りを投げると犯人の手に命中し、銃もはじけ飛んでしまった。

「うっ、痛い！」

「さあ、世の中を困惑させる悪党よ、ここが年貢の納めどきよ。
正義の鉄槌、受けなさい！エンジェルアロー・アンデュレーション
！！」

ピンク・エンジェルは両手を犯人に向けて、精神を掌に集中させた。すると物凄いパワーが発生し、目に映らない速さで波動が犯人に襲いかかる！

「ウワア！何だこりゃあ！！」

ボタン！

そのまま犯人は失神してしまった。

「警察だ！犯人に告ぐ、お前はもう逃げられない。大人しく観念して……ん？」

銃声がしたので機動隊が乗り込んできたが、倒れている犯人に拍子抜けしてみんな大口をあんどぐり開けている。

「あなた達ちよつと遅かったみたいね。私が倒しといたのであとはよろしくお願いします。では、私はこれで……」

「あつ、ちよつと君」

彼女は瞬く間に裏口の方へと去って行ってしまった。名前も言わず、疾風のように――

「今のが噂の、ピンク・エンジェルか……」

事件の陰に女あり、事件解決の陰にも女あり。

凶悪事件の起こるところ、神出鬼没に現れる女性ヒーロー“ピンク・エンジェル”

その謎のヴェールに包まれた実体は誰も知らない——でいた。

「四つ葉銀行強盗事件で、また“美少女仮面ピンク・エンジェル”が活躍か……」

「山原くん、もしかしてその事追ってる？」

「アラ、分かります？ 21世紀のジャンヌ・ダルクといわれてる彼女が誰なのか^{つか}が掴めたら大スクープなんだけどなあ。あゝあ……あ、こんな時間。編集長、私お昼に行ってきます」

「ピンク・エンジェルの事を考えていたら、昼メシも食いそびれたってか？ ハハ……ゆつくり行っておいで」

「ハイ」

出版社勤務の山原あずさは週刊誌の編集室にいて、ピンク・エンジェルの事を記事にしてはいつも気になっていた。

女性でありながら男よりも凄^{すご}い力をふるい、しかも名前も語らず悪をくじくとは格好良過ぎて同じ女性として尊敬どころか敬愛さえしている。

しかしそれだけにとどまらず、彼女のジャーナリズムはピンク・エンジェルの素性をつきとめ、本人に直接会って取材し、独占スク

ーブを必ず取るという野心に密かに燃えているのだ。

あずさは駅前のハンバーガー屋の二階でぼんやりアイスコーヒーをすすっていると、午後の気だるい瞼まぶたもパツチリ目覚めるような朗報がふと耳に飛び込んできた。

「ねえねえ、ちょっと聞いたんだケドお、ピンク・エンジェルってウチラの学校の2年の藤堂とうどうってコらしいじゃん。アタシも思っただけどオ、超似てなくね？」

「ウン、超似てるー。あのコ、ホントにピンク・エンジェルだったら、マジヤバイ〜」

（あら、あの子たち薫風くんぷう女学院の制服着てるわ！）

こういう所にたむろする女子高生は噂うわさ好きで、しかもその噂うわさの信憑性びようせいはあまりない。

しかしあずさは薫わらをも掴つかむ気持ちで、その女子高生たちに近づいていった。

「ちよつとあなたたち、今の話の事だけど」

「は！？何このオバサン……」

『藤堂可憐？あぁ、知ってるよ。髪が長くて顔もキレイだよ。ミス薫風とも言われてるくらいだからね』

『可憐を探してるなら、彼女のクラスは2 - Aよ。窓際の席に座ってるわ』

『あのねえ、ナントカっていう女優さんに似てる。名前思い出せないけど。お転婆なコじゃないよ。大人しくて、どっちかってゆーとおじよーサマってカンジ』

女子高生の情報をいくつかリサーチして、あずさは授業中の校舎にこっそり忍び込んでいた。

本当は不法侵入なのだろうが、藤堂可憐の顔を確認するだけだから……と罪悪感を押し殺し、自分の中で無理矢理正当化していた。そして、彼女がいるという2年A組の前まで来た。

（えーと、どの子かしら？窓際の席で、髪の長いおしとやかできれいな子……あ、きつとあの子だわ！）

可憐と思しき生徒を見つけると、あずさはすかさずデジカメでその姿を捉えた。

先生に見つかりと厄介な事になってしまう。足音を消しながら、あずさはその場をそそくさと立ち去って行った。

そして、放課後――

あずさは校門の前で張り込んでいる。記者も刑事のように張り込みという地味で大変な仕事を体験するが、もう慣れっこになってしまった。

でも今日の場合、これからもつと大変になる。

女子高生が、ひとりまたひとり校門をくぐって出てくる。はじめは少人数でも、そのうち沢山の生徒が蜘蛛の子を散らすように溢れてくるのだ。

その中で可憐を探すのはなかなか容易ではない。しかしあずさは諦める訳にはいかない。

ジャーナリスト魂が、あずさの背中を押している。

（あの子かしら？ううん違うわ。そっちの彼女？似てるけど別人ね。なかなか出てこないなあ……）

『可憐は部活に入っていないわ。帰宅部よ』

噂の娘は、下校時間になったらお出ましになる筈だ。デジカメの画像と女子高生たちの顔を根気よく見比べるが、想像以上に大変な作業にあずさは段々疲れてきてしまった。

「あーもう訳わかんない！帰ろっかな……」

諦めかけたそのとき――

「あ！あの子。間違いない、彼女がきつとそうよ！」

まさに教室で見かけた女の子が、目の前で友達に手を振っている。あずさの頭の中に、自社の雑誌が「独占スクープ！仮面の美女ピ

ンク・エンジェルは実は女子高生だった！」の記事を飾り、誇らしげに微笑する自分がいた。

「あの、ちょっと待って。あなた、藤堂可憐さん？」

「はい、そうですけど……」

（やっぱり！頑張った甲斐あったわ。あー自分をホメてあげたい）

お目当ての人物にやっと会えて、“昇進”の文字も頭にチラリと横切っていった。

あずさは舞い上がっていきそうな気持ちを抑え、密かにレコーダーのスイッチをオンにした。

「ちょっとお話、いいかしら？」

「はあ、ちょっとならいいですけど」

「あなた、ピンク・エンジェルってご存知？」

「え？……」

（顔色が変わったわ！手ごたえはガッツリね。よし！あとはひたすらプッシュ、プッシュ）

あずさはすっかり悦に入っているが、彼女だけでなく喜んでいる人間は他にもいた。

『ピンク・エンジェルたん、カワイイー萌え〜』

そう、ピンク・エンジェルヲタクである。

PCの中はもとより、部屋中ピンク・エンジェルの写真を貼り付け、頭の中は淫^{みだ}らな妄想^{もっそう}でいっぱいになっていて、彼もまた噂^{うわさ}を聞きつけて学校の前までやって来たストーカー男だ。

「なんだようあの女、ピンク・エンジェルたんにつきまとって。ウザいなあ。人の恋路^{じやま}を邪魔するヤツは氏ねえ！」

魔の手が忍び寄ろうとしている事に、あずさはまだ気づいてはいない。

次の日も、また次の日も、あずさは可憐^{かれん}を待ち伏せて執拗^{しつよう}にコンタクトをとっていった。

「あなた本当はピンク・エンジェルなんですよ！？ネタはあがってるんだから隠さなくてもいいじゃないの」

「ですから違うんですってば！あんなのただの根も葉もない噂^{うわさ}です！」

「あなたも強情ねえ。思い切って言っちゃえばスッキリするでしょうに」

あずさも必死だ。頭の中の独占スクープを実際に載せるまで、絶対に引き下がない覚悟でいる。

相手が岩のように頑固だから一か八か鎌^{かま}をかけてみようと、ふと

そう思ってみた。

「でもね、証拠があるの。きれいに立ち去ったつもりでも、事件現場に置き忘れた決定的な証拠がね」

「は?.....」

「またもや、可憐かれんの顔色が変わった。あずさはそれを見逃さずニヤリと口角を上げた。

(ついにシッポを出すわね!)

「オイ、その女!ピンク・エンジェルたんをいじめな!オマエなんてお仕置きしてやるう!」

「ちょっと、何!?あなた何なの!」

「ストーカーヲタ男の堪忍袋かんにんぶくろの緒おが切れてしまい、鬼のようにしつこいあずさをたちまち羽交締めはがいじにしてしまった。

「キヤーツ、やめてー!」

「ピンク・エンジェルたんが何をしたんだ!オマエ悪いヤツ、ピンク・エンジェルたんのかわりに成敗せいばいしてやるぞ!」

「ちょっと、何してるの。私ヘンタイに襲おそわれてるのよ!あなたピンク・エンジェルでしょ、ボーッと見てないで助けてよ!」

「イヤよ」

「何ですって、あなた正義の味方でしょ！？コイツが悪者なの
分からないの！？」

「私ピンク・エンジェルじゃありませんもの。仮にそうだったと
しても、マスコミの人間を助けて、後で記事に書かれてわざわざ世
間のさらし者になる馬鹿はいません。どっちにしても私にはできま
せんのでこれで失礼します」

可憐^{かれん}は何事もなかったように帰路に着き、たちまち二人の視界か
ら消えてしまった。

「ちよつとーっ、置いて行かないでよ！この変質者、何とかして
えーっ！！」

「ホントウルサイ女だな。ピンク・エンジェルたんも帰っちゃっ
たし仕方ない、この女でも襲^{おそ}うか。いひひひ……」

「ぎゃーっ！やめなさいよ！いい加減にしないと殺すわよ！！ア
ンタなんてブタ箱行きよ！
婦女暴行罪^{ぶじやうけいざい}で訴^{うった}えて……いやああー
やめてえー……！！！！」

あずさがどうなったかは、誰も目撃しなかったしその後は誰にも分からない。

ただそれ以来、マスコミの人間のあいだにはピンク・エンジェルを追うと行方不明になるとの噂が実しやかに流れているそう——

<おわり>

(後書き)

ご覧いただきありがとうございます

この作品は <http://blog.son-net.ne.jp/kohakunotoki/2007-05-16>
でも公開しております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2472c/>

美少女仮面 ピンク エンジェル

2010年12月29日22時56分発行